

UNIT	テーマ	内容	対応する既存文法事項と問題点
0	<p>● エッセンス講座: Orientation ・VSOPメソッドへの導入講座</p> <p>人間は、物や人を表すのに、4通りの表現の仕方がある。品詞の制限があると、言葉は使えない。「話し手の判断(V)」は、[V1+V2]の2つの部分で構成され、「V1は判断詞」「V2は判断内容語」と考える。</p>	<p>do・be・haveを使った「四つの基本ロジック」 do・be・have は「助動詞のような記号的な言葉」 VSOP英文法では「判断詞(V1)」と呼ぶ。</p> <p>・何がどうする。 動詞 [do] Verb ・何がどなんだ。 形容[動]詞 be + □□ ・何が何だ。 形容詞 be + 名詞 ・何には、何がある。存在、所有を表す。 have + 名詞</p>	<p>do: 助動詞 be: 本動詞・助動詞 have: 他動詞 [問題点] ⇒ 品詞名が違うので「働きも違う」と思ってしまう。</p>
1 be ①	<p>● be □□ : 形容詞 ・人の状態、気持ち、状態</p>	<p>I am happy with my progress in English. I am sure of my success in the future. I am ready for any job in the world.</p>	<p>be + 補語 [問題点] ⇒ 意味の中心になっている言葉を「補う語」と呼ぶ。</p>
2 be ②	<p>● be □□ : a 名詞 ・人の性質・性格、種類</p>	<p>I am a tourist from Japan. I am a serious person of few words. I am a problem solver and innovative idea generator.</p>	<p>be + 補語 [問題点] ⇒ 意味の中心になっている言葉を「補う語」と呼ぶ。</p>
3 be ③	<p>● be □□ : 前置詞句: ・人の場所・人の状態 具体的な意味と 抽象的な意味の使い方の違い</p>	<p>I am at my desk in the office. I was with Tomo at a coffee shop. I am in the mood for <i>sushi</i> for lunch. I am in a hurry to get the blog up and running.</p>	<p>be + 修飾語 又は 熟語(イディオム) =「be動詞が存在を表す」となっているので文法的説明ができない。</p>
4 be ④	<p>● be □□ : 副詞: ・人の状態、位置の変化 in, out, up, on, off</p>	<p>I am in for a real treat. I am up for a drink tonight. I am out of shape due to drinking too much alcohol and eating bad food. I am behind on my car loan. What should I do?</p>	<p>be + 修飾語 又は 熟語(イディオム) 「be動詞が存在を表す」となっているので文法的説明ができない。</p>
5 be ⑤	<p>● 判断語の間は「補助的な判断」を言う重要な場所: {Mid} ・この場所で使う言葉に、品詞の制限はしていない。</p>	<p>● 程度 ... very, little, much, too, almost など ● 頻度・回数 ... often, sometimes, once, always ● 方法・様子 ... so, well, slowly, fast, hard など ● 否定 ... not, never, seldom, hardly, scarcely, no longer</p> <p>I am always happy with you now. I am always a good husband for you. I am no longer in office for a reason. I am three payments behind on my car loan.</p>	<p>頻度・程度を表す副詞は、「一般動詞の後ろ、be動詞の前」 [問題点] ⇒ この場所で使う言葉を「副詞」と呼ぶので、副詞以外が使われている場合がよく分からなくなる。名詞も動詞もこの場所で使っている。また、副詞が名詞を修飾する使い方ができる。定義矛盾。</p>
6 be ⑥	<p>● 説明語(M)と叙述語(P)の使い方: ネクサス ①解説 ・名詞の後ろの説明語 ★具体的な名詞 + [be] + □□ ★名詞の後ろで説明語で使う言葉に品詞の制限は無い ⇒ be が抜けると説明語(M)になる。 「形容詞、前置詞句、副詞、名詞」が名詞の後ろで皆同じ使い方をする。</p>	<p>・いろいろな言葉のネクサス ① The man, CEO of the company, is very fat. ② The man happy with weight loss, ③ A fat man out of shape can be one of the all-time greats. ④ The baby in front of me was looking straight at me.</p> <p>● 英語のネクサス: 名詞-[be]-V2-O V2に使う言葉に品詞の制限は無い。 ・③の使い方は今までの解釈法だと「副詞の形容詞用法」になる。</p>	<p>同格名詞、又は、後置修飾語 ⇒ 形容詞句 [問題点] ⇒ 呼び方がバラバラなので異なる表現だと思ってしまう。また、副詞も名詞の後置修飾になるので「副詞の形容詞用法」と呼べるような矛盾した言葉の使い方となる。</p>

Unit	テーマ	内容:	対応する既存文法事項と問題点
7 be ⑥	<p>●裏ワザパターン②練習</p> <ul style="list-style-type: none"> 具体的な名詞の後ろに説明語を使う練習。 日本語と逆な語順に慣れる。 	<p>●英語のネクサス:名詞-[be]-V2-O。</p> <p>「名詞の後ろに説明語が付く」語順が日本語と逆になっているのが、英語に馴染みにくい最大の原因になっている。</p> <p>判断語(V2)に使う言葉に品詞の制限が無いのと同じように、説明語(M)で使える言葉にも品詞の制限がない。「品詞で分類して解釈」しようとすると英語が理解できなくなってしまう。</p>	<p>後置修飾の場合、日本語と語順が逆になるが、文法嫌いになった人は、この逆の語順に慣れず、結果として、英語の理解を諦めがちである。</p>
8 Verb ①	<p>●基本動詞の使い方:概論</p> <p>「4通り」の使い方がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自動詞・他動詞は「使い方」の区別であって、各基本動詞が持つ「固有の使い方」の違いではない。 自動詞の使い方は「主語(S)のことを叙述」している使い方。 他動詞の使い方は「対象語(O)のことを叙述」している使い方。 	<p>●get の「自・他動詞の4通り」の使い方</p> <p>基本動詞の使い方は「4通り」に集約される。</p> <p>自動詞・他動詞の使い方の区別 = 2通り</p> <p>「具体的な内容」か「補助的な意味」かで = 2通り</p> <p>各々が組み合わさって使われるので、2通り×2通り=4通りになるが、どの形もSVOPのパターンで意味を作っている。</p>	<p>今の解釈では「getにたくさんという意味がある」と説明している(辞書を参照)。しかし、getのような基本動詞は「変化の様子」しか表しておらず「getの後ろの言葉」が意味を作っている。</p>
9 Verb ②	<p>●自動詞の使い方:2通り</p> <p>①具体的な行為を表している「自動詞の使い方」</p> <p>②「補助的な動きの様子」を表している「自動詞の使い方」</p> <ul style="list-style-type: none"> どちらの場合も「動詞の後ろの言葉」が中心の意味を表している。 	<p>●自動詞の使い方しかし動詞:非常に少ない:</p> <ul style="list-style-type: none"> be、go、comeは自動詞の基本ロジック 自・他動詞の両方の使い方をする動詞が多く、ほとんどの基本動詞は「自動詞の使い方」をする:判断語としての意味を決めている言葉は、動詞の後ろの「名詞、形容詞、副詞、前置詞句」などの言葉。 自動詞の使い方も S-V-O-P 	<p>「動詞が意味の中心」になっているような解釈をするので、基本動詞の使い方が文法的に説明ができなくなるので、「熟語(イディオム)」「慣用表現」と言わざるを得なくなる。</p>
10 Verb ③	<p>●2通りの他動詞の使い方</p> <p>①具体的な行為を表す「他動詞の使い方」</p> <p>②「補助的な動きの様子」を表す「他動詞の使い方」=どんな動詞でも「使役の意味」になる。</p> <p>★どの場合も対象語(O)の後ろの言葉が意味を作っている。</p>	<p>・代表的な他動詞の使い方:make、do、take、bring、have、want、play、fly、drive</p> <p>・補助的な使い方は、対象語(O)の後ろの言葉[叙述語(P)]が文の意味を決める。</p> <p>・対象語(O)の後ろ叙述語(P)には、形容詞や名詞、前置詞句、副詞などが使われる。</p> <p>・叙述語(P)で使う言葉に品詞の制限は無い。</p>	<p>・目的語(O)の後ろの言葉を、「目的格補語(OC)」とか「前置詞句や副詞」を「修飾語(副詞[句])とバラバラに呼んで「オマケの情報」としている。実は、英語は最後の言葉が「重要な情報」になっている。</p>
11 Verb ④	<p>●haveの「他動詞の使い方」</p> <ul style="list-style-type: none"> 他動詞の使い方の基本は、haveである。 have + 目的語(O) + □□(いろいろな言葉) 	<p>●叙述語(P)で使う言葉に品詞の制限は無い。</p> <ul style="list-style-type: none"> have + 目的語 + [be] + 形容詞 get + 目的語 + [be] + 名詞(haveは使わない) have + 目的語 + [be] + 副詞 have + 目的語 + [be] + 前置詞句 <p>haveは「OがP(V2+□□)という状態にする」という使役の意味で使っている。</p>	<p>通常「have + O + OC」と説明されているが、OCにあらゆる種類の言葉が使われているので、補語(C)と呼べない副詞や前置詞句もOCの部分で使っている。</p>
12 Verb ⑤	<p>●組み合わせた判断語(V)</p> <ul style="list-style-type: none"> 動詞 + □□ は自動詞の使い方 動詞 + 目的語(O) + □□ は他動詞の使い方 自・他動詞の両方の使い方をする動詞がたくさんある。 	<p>・動詞 + □□ は自動詞の使い方</p> <p>・動詞 + 目的語(O) + □□ は他動詞の使い方</p> <p>基本動詞: get、make、run、give、take、put、setなどは、□□(いろいろな言葉)と組み合わせ意味を作るが、□□が「意味の中心」を表し、動詞は、「変化の様子」を表している。</p> <p>・句動詞と呼ばれる「動詞 + □□」の組み合わせた使い方は「自動詞の使い方」でも「他動詞の使い方」でも使われる。</p>	<p>通常「熟語(イディオム)」とか「慣用表現」と呼んで、文法の埒外にしている。「組み合わせて使う」という英語の基本ロジックで使われている。</p> <p>熟語(イディオム)と呼ばれる使い方は、英語の基本ロジックで使われている。</p>

Unit	テーマ	内容:	対応する既存文法事項と問題点
13 Verb ⑥	<p>●基本動詞の使い方のまとめ</p> <p>・基本動詞の使い方は、S-V-O-P という語順にあてはめて使っている。</p>	<p>・動詞によって使い方が決まっているのではない。</p> <p>・動詞の使い方が予め4通りあり、その枠に言葉をあてはめて使っているだけ。</p> <p>・自動詞・他動詞の使い方の違いで「2通り」</p> <p>・具体的な意味か補助的な意味かで「2通り」</p> <p>★重要な点は、O-[V1]-P が「文の中心の意味を表している」ということである。S-V は、O-[V1]-P に対して「話し手の判断」を表しているだけ。</p>	<p>「五文型に分類」という考え方で、特定の動詞を「～文型で使う」というような刷り込みでしまう。</p> <p>辞書を引けば分かるが make, get などの基本動詞はあらゆる文型で使っている。</p>
14 be+活用した動詞 ①	<p>●活用した動詞の使い方:</p> <p>動詞の活用形は4種類</p> <p>①doing ②done/ -ed, ③to do ④a do</p> <p>・be □□ と have □□ で組み合わせて判断語(V)にする。</p>	<p>VSOP英文法では「動詞の活用形」を、to do, doing, done/ -ed と a do の4種類と考え、各々の活用形は「その形が表している意味」の違いだけで、be や have と組み合わせて主語の後ろの形で使うと「話し手の判断」を表していると考え。これにより「あらゆる種類の言葉」が「品詞の制限なく話し手の判断」で使われていることを説明する。</p>	<p>「活用した動詞」は通常「準動詞」と呼ばれ、「進行形」「受動態」「be to do」構文というようにバラバラに考えている。また、to do と a do の形が、現在分詞形や過去分詞形と同じ使い方だと気づけなかった。</p>
15 be+活用した動詞 ②	<p>●S is doing .</p> <p>現在分詞の使い方(進行形)</p> <p>doing の正確な意味を理解しよう。</p>	<p>doing は、「ある動作・状態が「始まって→しばらく続いて→そのうち終わる ⇒ 繰り返す」という4つの意味を内包している動詞の活用形。</p> <p>・「起 ⇒ 承 ⇒ 結 ⇒ 繰り返す」のいずれかの意味で使っている。</p> <p>・「英語の現在形」は常に「事実的状态を表す」のに対して S is doing は「動詞の種類に限らず」で「その時の行為」を表している。</p>	<p>通常「進行形」は「その時の行為」の使い方が最初に教えらるるので「これから起きることになっている」「近接未来」の使い方の理解が不足。また「『状態を表す動詞』は進行形にしない」と覚えると、日常英語は使えなくなる。</p>
16 be+活用した動詞 ③	<p>●S is done/-ed</p> <p>過去分詞の使い方:①受身(受動態)の意味なる理由</p> <p>・have done/ -ed との比較</p> <p>・be done/ -ed の「完了形」</p>	<p>S is done/-ed : done/-ed は「既に～に状態になっている」という意味を表す。</p> <p>be と組み合わせると「～されている」という受け身の意味の「話し手の判断」となる。「～し終わっている」という意味使うこともある。</p> <p>have との組み合わせると「もう既に～になっている」という「完了」の意味になる。</p>	<p>S is done/-ed は「受動態」され、「受け身の意味」しかないように教えているが、S is done/ -ed で「完了」の意味になる表現がだくさんある。また、気持ち・感情の表現が何故受け身になるか適切に教えていない。</p>
17 be+活用した動詞 ④	<p>●S is to do</p> <p>to do の本来の意味:「[必ず]～する」で使っているので「</p>	<p>S is to do:「これから必ず～することになっている」という意味の「話し手の判断」を表す。</p> <p>他の動詞の活用形が be と組み合わせなかった場合と同じ使い方になっている。</p> <p>これにより to-不定詞の使い方の理解がとても簡単になる。</p>	<p>通常「be to do」の構文」と呼び、文法の埒外に置いて、「予定、義務、可能、意図・願望、運命、目的などを表す」とされる。「構文」にするので、to-不定詞の使い方が分かりにくくしている。</p>
18 be+活用した動詞 ⑤	<p>●S is a do</p> <p>・a do は「動詞の活用形の一種」</p> <p>・「一回～をする/もの」という意味で使う。</p>	<p>be a do :動作や行為を「1回する人・物・事柄」として表している。</p> <p>「動詞に a/an/the (冠詞)を付けた a do」は、他の動詞の活用形と同じように、S is a do. で使う。</p> <p>have a do や make a do, take a do, give a do など「英語の組み合わせロジック」である。</p>	<p>a do は今の解釈では、ほとんど説明されていない。そのため熟語(イディオム)だらけになってしまった。「基本動詞は a/an/theを付けると名詞に換わる」</p>

Unit	テーマ	内容	対応する既存文法事項と問題点
19 be + 活用した動詞 ⑥	<p>●主語の後ろの説明語②</p> <p>・活用した動詞のネクサス 名詞-[V1]- V2 - O 名詞-[be]- doing - O 名詞-[be]- done - O 名詞-[be]- to do - O 名詞-[be]- a do - O</p>	<p>活用した動詞も「be を抜いて使う」と、名詞の説明語になる。さらに、この語順で、他動詞の使い方の時の目的語(O)に対する叙述語(P)としても使う。</p> <p>・英語のネクサス: 名詞-[be]-V2-O-[P]</p> <p>名詞の説明語に品詞の制限が無いのと同じように、叙述語(P)に使う言葉にも、品詞の制限は無い。</p> <p>・他動詞の使い方のネクサス: S-V-O-[be]-P</p>	<p>名詞の後ろの説明語を「後置修飾」とか「形容詞用法」と呼んでいる。この定義に従うと「あらゆる種類の言葉が形容詞句」となってしまう、「品詞の定義」が意義を持たない。</p>
20 have + いろいろな言葉 ①	<p>●have + □□の使い方</p> <p>・have + 具体的な名詞 ・have + 抽象名詞</p> <p>have は英語の動詞の中で1番多く使われる言葉。 have を適切に使えるよう、ロジックを理解しましょう。</p>	<p>・have + □□ : 「□□がある」という意味を表す。 have to do : 「これから必ず～する必要がある」 have a do : 「一回～をする」 have done : 「し終わった状態である」 have 抽象名詞: 「[抽象名詞の状態]がある」</p> <p>どのような言葉を使っても have の意味・働きは同じ。</p>	<p>have の後ろの言葉が「具体的な名詞=人/物」にしか説明しない。抽象名詞が使われる場合は文法として説明せず「熟語(イディオム)」「慣用表現」と暗記事項とする。</p>
21 have + □□	<p>● have done/-ed 1回目</p>	<p>have done/ -ed は「し終わった状態を今持っている」 ⇒「し終わった状態である」 be done/-ed でも同様の意味を表す場合がある 他の動詞との組み合わせと同じように、have とdone/ -ed が組み合わさっているだけ。</p>	<p>通常「完了形」と呼んでいるが、この形を学習始めに「完了・結果、経験、継続」と無理に分類しようとするので、大きな混乱が起きる。文意が分からなければ分類はできない。</p>
22 have + □□	<p>● have done/-ed 2回目</p> <p>「完了・結果、経験、継続」というように区別は、have done/-ed 以外の部分、中位: {Mid} の言葉が「叙述語(P)」の内容によらなくてはならない。 「完了形」という英文法用語自体が日本人には「過去のこと」のように思いがちだが、「have done/-ed」は「今の状態を伝えている表現」である。</p>		
23 Verb + □□	<p>●Verb done/ -ed</p> <p>・have done/-ed の組み合わせに非常に似ているが、done/ -ed の意味は異なる。</p>	<p>「動詞 + done/-ed」の組み合わせは、done/ -ed が受け身の意味を表し、動詞は「補助的な判断」を表している。「組み合わせで意味を作る」という英語の基本ロジックによって使われている。 この時、have 以外の組み合わせでは、done/ -ed は、受動的な意味になり、have と組み合わせた、場合だけ能動的な意味になる。</p>	<p>「動詞 + done/-ed」の組み合わせはあまり説明していない。動詞の後ろの「done/-ed」を「補語」と呼んでいるので「形容詞」と説明されるので用語の混乱が起きる。</p>
24 Verb + □□	<p>● [do] Verb doing</p> <p>・ be □□ doing ・ have □□ doing</p> <p>これらは、「[V1 + V2] + doing」という組み合わせで使われている。</p>	<p>判断語(V)の後ろでdoing を使うと doing が判断の中心で、前で使っている判断語(V)の部分は「補助的な判断」の働きになる。この場合の doing も「ある動作・状態が『始まって→しばらく続いて→そのうち終わる⇒繰り返す』」という doing の本来の意味を含意している。</p>	<p>Verb doing の形の Verb は他動詞で、doing は目的語とされ「動名詞」と呼ばれている。これだと「自動詞 + doing」は説明できないので教えていない。</p>
25 Verb + □□	<p>● [do] Verb of doing</p> <p>・ be □□ of doing ・ have 名詞 of doing</p> <p>「前置詞の後ろの doing」</p>	<p>判断語(V)の後ろで「前置詞の後ろで doing -O-[P]」が使われている場合は、全体で「対象語(O)」を形作っている。対象語(O)の内部に「V2-O-[P]」の構造が組み込まれて、まとまった一つの意味を作っている。</p>	<p>「前置詞の後ろは、動名詞」と機械的に説明しているため、その中に構造があることになかなか気が付かない。</p>

Unit	テーマ	内容	対応する既存文法事項と問題点
25 Verb+ □□	<ul style="list-style-type: none"> ● [do] Verb of doing ・ be □□ of doing ・ have 名詞 of doing 「前置詞の後ろの doing」	判断語(V)の後ろで「前置詞の後ろで doing - O-[P]」が使われている場合は、全体で「対象語(O)」を形作っている。対象語(O)の内部に「V2-O-[P]」の構造」が組み込まれて、まとまった一つの意味を作っている。	「前置詞の後ろは、動名詞」と機械的に説明している、その中に構造があることになかなか気が付かない。
26 Verb+ □□	<ul style="list-style-type: none"> ● [do] Verb to do、 ・ be □□ to do、 ・ have 名詞 to do これらは、「[V1+V2] + to do」 という組み合わせで使われている。	to do の前で使われている判断語(V)は「補助的な判断」を表している。 to do の前では、いろいろな品詞の言葉を使っている。つまり、現実の英語では品詞の制限は無いのである。品詞で区別せずに「判断補助語 + to do」という組み合わせ方になれることが重要である。	「to-不定詞」と呼ばれ、「名詞・副詞・形容詞の3用法がある」と説明されているが、これらの用法にあてはまらない表現がたくさんあり、それらは「熟語(イディオム)又は慣用表現」とされている。学習者が混乱する文法事項の一つになっている。
27 Verb+ □□	<ul style="list-style-type: none"> ● [do] Verb to do と [do] Verb doing の意味の違い 	to do 「[必ず] ~する」で doing は「~している」という意味で使っている、前の動詞との組み合わせ方は、それぞれの「活用形の意味の違い」を理解していれば簡単に分かる。 動詞の意味の違いで組み合わせ方が決まっている。	動詞の後ろのto-不定詞は「名詞的用法」、動詞の後ろの doing は「動名詞」というように「名詞」と呼ぶだけなので、意味の区別を考えなくなる。
28 Verb+ O+ □□	<ul style="list-style-type: none"> ●基本動詞のS-V-O-P 「補助的な他動詞の使い方」。 S-V-O-Pの典型的語順。 Pで「活用した動詞」を使う。 Pが意味の中心を作っている。 日本語の「述語」になっている。	<ul style="list-style-type: none"> ● S-V-O-[be] -P(□□-O-[P]). Pで活用した動詞を使う <ul style="list-style-type: none"> ・ S-V-O-[be] - doing - O. ・ S-V-O-[be] - to do - O. ・ S-V-O-[be] - done/-ed - O. ・ S-V-O-[have] - a do - O. <ul style="list-style-type: none"> ●対象語(O)を主語として「いろいろな言葉」をPで使う。 OとPの間に、判断詞(V1)が抜けて(ネクサス)、「O-[be]-Pで「一つの文」を作っている。 S-V-O-[V1]-P. Sが-Vするのは- {O が P になるように}です。 P に品詞の制限は無い。	第5文型: S+V+O+OCと呼んでいるが、目的格補語(OC)の部分に「名詞・形容詞・副詞・前置詞句・to-不定詞・現在分詞・過去分詞・節を使う」としている。主格補語(SC)は「名詞・形容詞」と説明しているので定義矛盾が起き混乱する。 have, get, make, let, のように目的格補語(OC)で「動詞の原形」を使う動詞を「使役動詞」と呼んでいるが、目的格補語(OC)で他の品詞の言葉が使われても「使役に意味」で使っている。

●「自動詞の使い方」も「他動詞の使い方」も、S-V-O-Pという語順に集約される。

